

1.2 野川流域及び事業対象地区の変遷

1.2.1 事業対象地区の歴史の変遷

(1) 野川流域の概要

野川は、多摩川の一次支川であり、国分寺東恋ヶ窪の(株)日立製作所中央研究所敷地内の大池に端を発し、国分寺崖線の湧水を集めながら崖線下をほぼ南東に流れ、小金井市、三鷹市、調布市、狛江市を経て、世田谷区二子玉川付近で多摩川へと合流する、流域面積69.6 km² (仙川流域、入間川流域を含む) 流路延長20.2kmの一級河川である (図-1.2.1参照)。

野川流域の河川は、流域で発掘された遺跡の分布・年代などから、旧石器時代まで遡り、人々の暮らしに係わりを持っていた。野川流域の土地利用と水文条件を大きく変えたものとして、江戸時代 (承応3年・1654年) の玉川上水の開通があげられる。江戸市民の飲用水として開発された玉川上水は33ヶ所の分水口から武蔵野台地の各地に導水され、野川流域では分水路の一つである砂川分水、そこから分岐する国分寺分水、小金井分水により、飲用水及び灌漑用水として導水された。流末が野川や仙川に入ること、水量は大きく増加した。

明治前期における野川の河道断面は幅2間 (約3.6m)、土揚5尺 (約1.5m) の素掘り水路であった。昭和初期は幅約4m、深さ約2mの柵渠もしくは木柵工の水路で、日量43,800 m³程度の流量があったと推定されている。

下流域では、江戸時代の初めに六郷用水が開削され、それまで多摩川に合流していた野川は六郷用水に流入するようになり、入間川、仙川も同様に六郷用水に併せられた。

戦後に入り、東京への人口集中と市街地の拡大に対応する河川改修事業が実施され、下流域は六郷用水から切り離され、再び多摩川に合流するようになり、改修事業の進捗とともに現在の野川流域の姿ができあがった。



(2) 事業対象地区周辺の歴史

事業対象地区周辺は一寒村であったが、明治後期から少しずつ宅地化が進み始めた。昭和初期～中期の野川には、四割の堰があり、周囲に多くの用水路や溜池があった。川の周囲には水田が広がっていた。野川や水田には、アユ、ハヤ（ウグイ）、フナ類、タナゴ類、ナマズ、ドジョウ、オハラドジョウ（ホトケドジョウ）、ウナギ、ヤツメウナギ、タニシ類、カワニナ、シジミ（マシジミ）、エビ類、サワガニ、ゲンジボタル、カエル類、イモリなど多くの生き物がいた。その名のとおり国分寺、小金井付近より発する野水を集めた川の流れる湧水量で現在の2倍程度、野川の水量で10倍近くもあったとの報告（土屋十圀氏）もある。

人口の増加と高度成長期の産業発展などにより、野川の水質は1965年前後をピークとして急速に悪化し、生き物の姿は見られなくなった。市街化や水質の悪化に伴い、用水路や溜池もなくなり、1970年には周辺で最後の田んぼもなくなった。また、市街化による湧水の減少、1965年の玉川上水の通水停止、下水道の普及などにより野川の水量は著しく減少し、近年は渇水期にたびたび涸渇するようになった。一方、下水道の普及などにより川の水質はかなり改善され、1985年頃からは生き物の姿がかなり戻ってきている。



昭和35年（1960）頃
資料：水澤静男「あの頃その頃の小金井写真集」



瀬切れした野川（小金井新橋下流・平成18年2月撮影）

1.2.2 玉川上水と野川

野川の流域には江戸時代の玉川上水開削に伴い農業用水、飲用水として多くの用水路網が作られていた。玉川上水には 33 カ所の分水口があったとされる。(東京都公文書館所蔵「上水記」)(図-1.2.2)

このうち、玉川上水の分水である砂川用水から、国分寺分水、小金井分水の2本の水路がひかれ、ここからさらに5本に分水され、恋ヶ窪村、貫井村、国分寺村、小金井村の飲用水及び野川沿いの田んぼの用水路として利用されていた。(図-1.2.3)

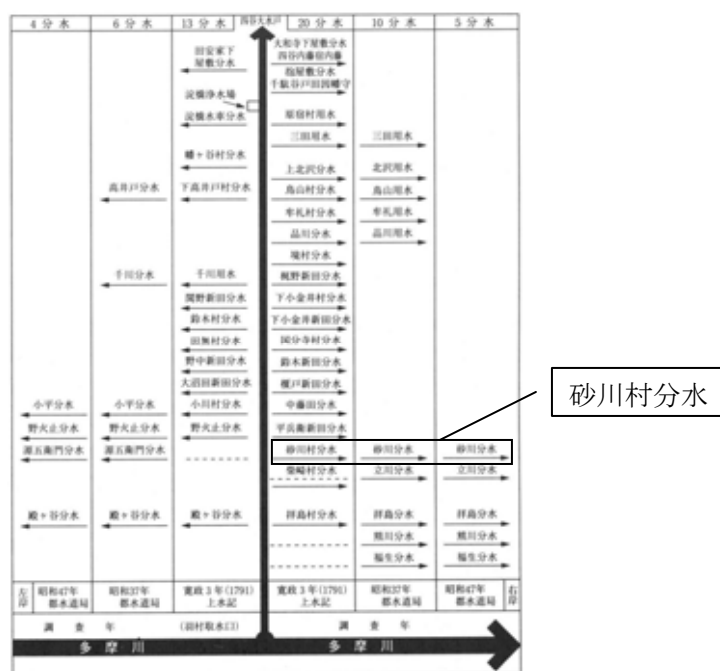


図-1.2.2 玉川上水分水路調査記録変遷略表(渡部一二による)



図-1.2.3 明治13年の迅速図

下記に昭和5年の地利水利地図を示すが、水路網については明治期から大きな変化がないといえる。

また、下図によると、はけの森の山の手側と野川周辺にいくつかの貯水池（ため池）があることがわかる。四割の堰付近には他よりもやや大きな貯水池（ため池）があることが記載されている。



図-1.2.4 昭和5年当時の地利水利図（貯水池部分に着色）

資料：土屋十圀（前橋工科大学）「野川の湧水と涵養域」

土屋十圀「都市河川の総合親水計画」信山社サイテック、1999

「小金井市地利水利図」（昭和57年「市民講座」わが町、わが暮らし 水と緑を再び考える—用水の昨日、今日、明日—）